

農業経営基盤の強化の促進に関する 基本的な構想

令和5年9月

真狩村

目 次

第1 農業経営基盤の強化の促進に関する目標

- 1 真狩村農業の概況
- 2 真狩村農業の現状と課題
- 3 農業経営基盤の強化の促進に関する取組方向
- 4 新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保に関する目標

第2 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの効率的かつ安定的な農業経営の指標

第3 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの新たに農業経営を営もうとする青年等が目標とすべき農業経営の指標

第4 第2及び第3に掲げる事項のほか、農業を担う者の確保及び育成に関する事項

- 1 農業を担う者の確保及び育成の考え方
- 2 真狩村が主体的に行う取組
- 3 関係機関との連携・役割分担の考え方
- 4 就農等希望者のマッチング及び農業を担う者の確保・育成のための情報収集・相互提供

第5 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項

- 1 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標
- 2 その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項

第6 農業経営基盤強化促進事業に関する事項

- 1 第18条第1項の協議の場の設置の方法、第19条第1項に規定する地域計画の区域の基準その他第4条第3項第1号に掲げる事業に関する事項
- 2 農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準その他農用地利用改善事業の実施の基準に関する事項
- 3 農業協同組合が行う農作業の委託のあっせんの促進その他の委託を受けて行う農作業の実施の促進に関する事項
- 4 その他農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項
- 5 農地中間管理機構が行う特例事業に関する事項

第7 その他

第1 農業経営基盤の強化の促進に関する目標

1 真狩村農業の概況

真狩村は、北海道の南西部に位置し、総面積は 114.43 km²で、秀峰「羊蹄山」の南裾野に広がり、地勢は概ね波状形をなし、農耕地は 200m～300m の丘陵地にある高原の畑作地帯である。

恵まれた気候条件のもとで、馬鈴しょ、豆類、てん菜などの畑作物に食用ゆり、だいこん、にんじん、アスパラガスなどの高収益野菜を組み入れた多様な作物を栽培するなかで輪作体系の維持とともに規模拡大を推進して地域農業の振興、経営の安定及び地域の活性化を展開している。

2 真狩村農業の現状と課題

真狩村は、食用馬鈴しょ、食用ゆりは地域農業の戦略作物と位置付け、病虫害の発生防止や抑制などの栽培技術の向上に努めて道内有数の産地を確立してきており、また、だいこん、にんじんは産地指定の野菜として生産を振興していることから、今後においてもこれらの作物を基幹とした畑作・野菜主体の生産体制の強化が必要となっている。

農業の持続的な発展を図り地域経済を振興させるためには、農地の生産性向上に不可欠な生産基盤の整備を基本として、農業従事者の高齢化や労働力不足に対応した軽労働作物の選定、農作業や家畜飼養管理技術の省力化及び高収益作物の導入などを積極的に進めることが必要であることから、馬鈴しょ、小麦、豆類、てん菜、食用ゆりね、だいこん、にんじん、スイートコーン、ブロッコリー、乳牛、肉牛を主体として農業の確立に努める。

真狩村の農業構造については、販売農家のうち専業農家及び第1種兼業農家を合わせた主業的農家が大半を占めており、専門的な農業経営を中心とした農業が展開されている。

しかし、農業従事者の高齢化が進行しているとともに農業後継者のいない農家も増加している状況であり、今後においては、機械更新や世代交代を機とした急速な農家戸数の減少が懸念される。このような現状と見通しの下に、農業が職業として選択し得る魅力とやりがいのあるものとなるよう、将来（概ね 10 年後）の農業経営の発展の目標を明らかにし、効率的かつ安定的な農業経営を確保・育成することとする。

3 農業経営基盤の強化の促進に関する取組方向

(1) 基本的な考え方

真狩村農業が持続的に発展していくためには、関係機関が連携し、地域の実情に

応じて、家族経営をはじめとする農業経営体が経営体質と生産基盤の強化を図りながら、農業生産額の増大や生産コストの縮減による農業所得の増大と6次産業化による農業経営の多角化の取組を推進するとともに、農業経営体を支える営農支援組織の育成を行うなど、効率的かつ安定的で多様な農業経営を育成・確保し、これらの担い手への農用地の利用集積・集約化を促進する。

また、持続可能な開発目標（SDGs）の目標の一つである持続可能な農業生産を進めるため、環境と調和した農業を推進する。

（2）効率的かつ安定的な農業経営の目標とする所得水準及び労働時間

農業が職業として選択できる魅力のあるものとするため、真狩村又はその近隣の市町村において既の実現している優良な経営の事例を踏まえ、主たる従事者が、地域における他産業従事者と遜色のない年間労働時間の水準を達成しつつ、他産業従事者並みの生涯所得に相当する年間農業所得を確保できる効率的かつ安定的な農業経営の育成・確保に努める。

なお、目標とする所得水準及び労働時間は次のとおりとする。

| | |
|----------|----------------------------|
| 目標年間農業所得 | 主たる従事者1人当たりおおむね500万円 |
| 目標年間労働時間 | 主たる従事者1人当たり1,700～2,000時間程度 |

※ 主たる従事者～農業経営において主体的な役割を担い、中心となって当該農業経営に従事する者

（3）新たに農業経営を営もうとする青年等の目標とする所得水準及び労働時間

自ら農業経営を開始しようとする青年等（法人の場合にあっては主たる従事者）の経営開始5年後における所得水準及び労働時間は、（2）に定める水準をおおむね達成することを目標とする。

ただし、このうち農外からの就農者や農家子弟のうち親から独立した経営を開始する者にあっては、経営が安定するまで時間を要することから、経営開始5年後の所得水準は、おおむね5割の達成を目標とする。

（4）効率的かつ安定的な農業経営の育成・確保

ア 認定農業者制度の活用

効率的かつ安定的な農業経営の改善を促進するため、認定農業者制度を活用し、農業経営改善計画の作成指導や認定後の農業経営改善計画達成に向けた市町村や農業委員会、農業協同組合、農業改良普及センターなど地域の関係機関・団体による指導・助言、女性や若い世代、高齢者の能力を活かすための夫婦・親子間の

農業経営改善計画の共同申請を推進する。

また、認定農業者等の担い手が主体性と創意工夫を發揮しながら経営発展できるよう、担い手への農用地の利用集積・集約化やICT*等の省力化技術の導入等の推進及び経営所得安定対策、低利融資制度など各種支援施策の活用を支援する。

※ ICTは、Information and Communication Technology（情報通信技術）の略

イ 農業経営の法人化の推進

農業経営の法人化は、経営管理の高度化や安定的な雇用の確保、地域の農地や優れた技術の円滑な継承など経営安定・発展の効果が期待されることから、税理士等の専門家や先進的な農業者による指導等を通じ、法人化のメリットや手続、財務・労務管理に関する情報やノウハウ等の普及啓発によって、農業経営の法人化を推進する。

また、民間企業等の経営力や資本力を活かした地域の農業者・関係者との有機的な取組を推進する。

このため、令和12年度（2030年度）における農業法人数を5,500経営体とする北海道農業経営基盤強化促進基本方針の目標などを踏まえ、真狩村の令和12年度における農業法人数の目標数を15経営体（令和3年1月現在：11経営体）とし、農業経営の法人化を推進する。

ウ 集落営農の組織化・法人化の推進

経営規模が小さな水田地帯や、農業従事者の高齢化、担い手不足が深刻化し、地域農業を担う個別経営や法人経営の育成・確保が当面難しい地域においては、農用地利用改善団体等と連携して、地域の将来像についての話し合い活動を重ね、担い手を明確化し、農用地の利用集積・集約化の方向を定める取組を推進することにより、集落営農の組織化及び将来的な集落営農の法人化を推進する。

エ 新規就農者の育成・確保

真狩村農業が、将来に向け持続的に発展していくためには、次代を担う新規就農者の育成・確保を図る必要があるため、農業への理解の醸成と関心の喚起に向けた取組を推進するほか、雇用就農を含めた就農促進に向けた情報提供や相談活動に取り組むことが重要である。

また、優れた経営感覚を身につけ、就農後における早期の経営安定を図るため、農業大学校等における実践的な研修教育や農業改良普及センターによる技術・経営指導、指導農業士等との連携など地域の研修体制の充実・強化等により、就農

から経営安定までの総合的な支援や地域の受入体制づくりを推進する。

就農希望者の経営に必要な農地や機械等の確保及び初期投資等による負担軽減のため、各種支援策の活用を推進する。

家族経営体における経営移譲や第三者経営継承、組織経営体の構成員の世代交代など、次の世代の担い手へ地域の農地や優れた技術を円滑に継承する取組を推進する。

オ 労働力不足への対応

農家戸数の減少や農業従事者の高齢化などによる慢性的な労働力不足に対応するため、若者、女性、他産業を退職した人材や外国人材などの多様な人材の確保と、障がい者の社会参画と農業経営の発展の双方を実現する「農福連携」により、雇用労働力の安定的な確保に向けた取組を推進する。

また、ロボット技術やICTの活用等、近年の進歩が著しく、構造的問題などの解決が期待されるスマート農業などの省力化生産技術、労働力不足に対応した生産技術等を積極的に推進する。

カ 女性農業者が活躍できる環境づくり

農業・農村の活性化につながる女性の経営・社会参画を促進するため、女性農業者の経営管理や生産技術等の向上、若い世代の女性農業者のネットワーク強化やグループ活動の活性化等により、女性農業者が活躍できる環境づくりを進め、持続可能な開発目標（SDGs）の目標の一つである男女平等参画や女性の活躍を推進する。

（5）農用地の利用集積と集約化

「地域計画[※]」の策定及び実現に向けて、地域計画推進事業、農用地利用改善事業、農地中間管理事業、農地中間管理機構（農地中間管理事業の推進に関する法律（平成25年法律第101号）第2条第4項に規定する農地中間管理機構をいう。以下同じ。）の特例事業等の農地流動化施策を推進し、効率的かつ安定的な農業経営への計画的な農用地の利用集積・集約化を促進する。

※ 地域計画は、これまでの人・農地プランを基礎として、農業経営基盤強化促進法（昭和55年法律第65号）第19条の規定に基づき、農業者等の協議の結果を踏まえ、農業の将来の在り方や農用地の効率的かつ総合的な利用に関する目標として農業を担う者ごとに利用する農用地等を表示した地図などを明確化し、市町村により公表されるもの。

（6）多様な農業経営の育成・確保

高収益作目やクリーン・有機農業の導入による農業経営の複合化や、農畜産物の加工や直接販売、ファームインといった6次産業化による多角化など、自らの創意工夫を活かした多様な農業経営の育成・確保を図る。

(7) 営農支援体制の整備

生産性の向上や労働負担の軽減などを図るため、コントラクター、TMRセンター及び酪農ヘルパーなどの営農支援組織の育成や体制整備を推進し、共同作業体系の確立、オペレーターなどの雇用のマッチングに向けた取組を推進するなど、多様な人材の確保と円滑な運営を促進する。

4 新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保に関する目標

(1) 新規就農の現状

真狩村の令和2年の新規就農者は2人であり、過去10年間、ほぼ横ばいの状況となっているが、従来からの基幹作物である馬鈴しょの産地としての生産量の維持・拡大を図っていくため、将来にわたって地域農業の担い手を安定的かつ計画的に確保していく必要がある。

(2) 新たに農業経営を営もうとする青年等の確保に関する目標

(1)に掲げる状況を踏まえ、真狩村は青年層に農業を職業として選択してもらえるよう、将来（農業経営開始から5年後）の農業経営の発展の目標を明らかにし、新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保を図っていくものとする。

ア 確保・育成すべき人数の目標

国が掲げる新規就農し定着する農業者を年間1万人から2万人に倍増するという新規就農者の確保・定着目標や北海道農業経営基盤強化促進基本方針に掲げられた年間670人の新規就農者の育成・確保目標を踏まえ、真狩村においては年間1人の当該青年等の確保を目標とする。また、現在の雇用就農の受け皿となる法人を10年間で4増加させる。

イ 新たに農業経営を営もうとする青年等の労働時間・農業所得に関する数値目標

自ら農業経営を開始しようとする青年等（法人の場合にあっては主たる従事者）の経営開始5年後における所得水準及び労働時間は、真狩村又はその近隣の市町村において既の実現している優良な経営の事例を踏まえ、主たる従事者が、地域における他産業従事者と遜色のない年間労働時間（主たる従事者1人当たり1,700～2,000時間程度）及び、他産業従事者並みの生涯所得に相当する年間農業所得（主たる従事者1人当たりの年間農業所得500万円程度）を目標とする。

ただし、このうち農外からの就農者や農家子弟のうち親から独立した経営を開

始する者にあつては、経営が安定するまで時間を要することから、経営開始5年後の所得水準は、主たる従事者1人当たりの年間農業所得250万円程度を目標とする。

| 営農類型 | 経営規模 | 生産方式 | 経営管理の方法 | 農業従事の態様等 |
|------------|---|--|---|---|
| ② 野菜＋畑作 | <p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・馬鈴しょ 2.0ha ・小豆 2.0ha ・だいこん 2.0ha ・にんじん(秋) 1.0ha ・食用ゆり根 1.0ha ・緑肥 2.0ha <p>経営面積計 10.0ha</p> | <p><主な資本装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・トラクター 1.5 台 ・フロントローダー 0.5 式 ・マニュアルスプレッダ 0.3 台 ・ライムソアー 1.0 台 ・ボトムプラウ 1.0 台 ・ロータリーハロー 1.0 台 ・総合播種機 1.0 台 ・ポテトplanター 1.0 台 ・施肥カルチ 1.0 台 ・培土機 1.0 台 ・スプレーヤー 1.0 台 ・ポテトハーベスター 0.5 台 ・ビーンスレッシュャー 0.3 台 ・ビーンハーベスター 0.3 台 ・サブソイラ 1.0 台 ・鎮圧ローラー 1.0 台 ・人参播種機 0.3 台 ・フォークリフト 1.0 台 ・農用トラック 1.0 台 <p><スマート農業技術></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自動操舵システムによる省力化 ・可変施肥技術の導入による施肥量の削減 <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農地の集団化を図る ・JAの各種共選施設等の利用 ・機械の共同化によるコスト削減と共同作業の実施による省力化 ・土壌診断に基づく適正な土づくりと輪作体系の確立 ・露地野菜は作期を分散して長期継続出荷し、労働の季節偏差を縮小 | <ul style="list-style-type: none"> ・畑作を導入した複合経営 ・露地野菜の作付で馬鈴しょの過作を回避 ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理、青色申告の実施 ・作目別原価の把握と分析 ・市場動向に的確に対応した計画的生産・販売 | <ul style="list-style-type: none"> ・家族経営協定の締結に基づく給料性、休日制の導入 ・農繁期における臨時雇用従事者の確保 <p>※労働力構成については、標準的な家族農業経営を想定し、主たる従事者1人・補助従事者2人として示す。</p> |
| ③ 野菜専業 | <p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・馬鈴しょ 1.0ha ・Gアスパラガス 0.7ha ・トマト 0.3ha ・食用ゆり根 0.8ha ・緑肥 2.2ha <p>経営面積計 5.0ha</p> | <p><主な資本装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・トラクター 1.0 台 ・マニュアルスプレッダ 0.2 台 ・ライムソアー 1.0 台 ・ボトムプラウ 1.0 台 ・ロータリーハロー 1.0 台 ・ロータリーティラー 1.0 台 ・ポテトplanター 0.5 台 ・精密カルチ 1.0 台 ・培土機 1.0 台 ・スプレーヤー 1.0 台 ・マルチャー 1.0 台 ・ポテトディガー 0.5 台 ・サブソイラ 1.0 台 ・農用トラック 1.0 台 <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農地の集団化を図る ・機械の共同化によるコスト削減と共同作業の実施による省力化 ・土壌診断に基づく適正な土づくりと輪作体系の確立 ・クリーン農業技術等の導入による農産物の付加価値向上 ・市場動向に応じた計画的な出荷及び販売 | <ul style="list-style-type: none"> ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理、青色申告の実施 ・作目別原価の把握と分析 ・市場動向に的確に対応した計画的生産・販売 ・GAPの取組推進 | <ul style="list-style-type: none"> ・家族経営協定の締結に基づく給料性、休日制の導入 ・農繁期における臨時雇用従事者の確保 <p>※労働力構成については、標準的な家族農業経営を想定し、主たる従事者1人・補助従事者2人として示す。</p> |

| 営農 類型 | 経営規模 | 生産方式 | 経営管理の方法 | 農業従事の態様等 |
|--|---|---|---|---|
| ④ 酪農 + 畑作 | <p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・馬鈴しょ 2.0ha ・てん菜 2.0ha ・小豆 2.0ha ・デントコーン 4.0ha ・牧草 15.0ha <p>経営面積計 25.0ha</p> <p>飼養頭数 47 頭</p> | <p><主な資本装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・トラクター 1.5 台 ・フロントローダー 0.5 式 ・マニユアスプレッダ 0.5 台 ・ライムソアー 1.0 台 ・ブロードキャスター 1.0 台 ・ボトムプラウ 1.0 台 ・ロータリーハロー 1.0 台 ・総合播種機 1.0 台 ・ポテトplanター 1.0 台 ・施肥カルチ 1.0 台 ・培土機 1.0 台 ・スプレーヤー 1.0 台 ・ビート移植機 0.3 台 ・ポテトハーベスター 0.5 台 ・ビートハーベスター 0.3 台 ・ビーンスレッシュャー 0.3 台 ・ビーンハーベスター 0.3 台 ・サブソイラ 1.0 台 ・鎮圧ローラー 1.0 台 ・農用トラック 1.0 台 ・ヘイモアー 0.3 台 ・ヘイテッド 0.3 台 ・ヘイレッキ 0.3 台 ・ヘイベーラ 0.3 台 ・コーンハーベスター 0.3 台 ・牛舎 1.0 棟 <p>(バンクリーナー、バルククーラー、パイプライン 一式)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・堆肥舎、尿溜 1.0 式 <p><スマート農業技術></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自動操舵システムによる省力化 ・可変施肥技術の導入による施肥量の削減 <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農地の集団化を図る ・JAの各種共選施設等の利用 ・機械の共同化によるコスト削減と共同作業の実施による省力化 ・土壌診断に基づく適正な土づくりと輪作体系の確立 ・堆肥舎を活用した良質な堆肥の生産 ・公共牧野を利用した育成牛管理 | <ul style="list-style-type: none"> ・部門間で副産物や農機具の有効活用 ・酪農は既存施設の改築による低コスト化 ・飼料用とうもろこし、牧草を地域で調達し自給飼料費の削減 ・馬鈴しょの過作を回避 ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場・飼養管理、青色申告の実施 ・部門別原価の把握と分析 | <ul style="list-style-type: none"> ・家族経営協定の締結に基づく給料性、休日制の導入 ・酪農ヘルパーの活用と農繁期における臨時雇用従事者の確保 <p>※労働力構成については、標準的な家族農業経営を想定し、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主たる従事者 1人 ・補助従事者 2人 <p>として示す。</p> |

[組織経営体]

| 営農類型 | 経営規模 | 生産方式 | 経営管理の方法 | 農業従事の態様等 |
|-------|--|--|---|---|
| 畑作＋野菜 | <p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・馬鈴しょ 7.0ha ・てん菜 5.0ha ・小麦（秋） 5.0ha ・小豆 4.0ha ・だいこん 4.0ha ・食用ゆり 0.8ha ・緑肥 4.2ha | <p><主な資本装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・トラクター 2.0 台 ・フロントローダー 1.0 式 ・マニユアスプレッタ 1.0 台 ・ライムソアー 1.0 台 ・ブロードキャスター 1.0 台 ・ボトムプラウ 1.0 台 ・ロータリーハロー 1.0 台 ・総合播種機 1.0 台 ・ポテトplanター 1.0 台 ・精密カルチ 1.0 台 ・培土機 1.0 台 ・スプレーヤー 1.0 台 ・ビート移植機 1.0 台 ・ポテトハーベスター 1.0 台 ・ビートハーベスター 1.0 台 ・ビーンスレッシュャー 1.0 台 ・ビーンハーベスター 1.0 台 ・ストローチョッパ 0.5 台 ・サブソイラ 1.0 台 ・鎮圧ローラー 1.0 台 ・フォークリフト 1.0 台 ・農用トラック 1.0 台 <p><スマート農業技術></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自動操舵システムによる省力化 ・可変施肥技術の導入による施肥量の削減 <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農地の集団化を図る ・JAの各種共選施設等の利用 ・機械の共同化によるコスト削減と共同作業の実施による省力化 ・分業体制による作業能率の向上 ・土壌診断に基づく適正な土づくりと輪作体系の確立 ・秋まき小麦収穫後に後作緑肥を栽培し土づくりを推進 ・露地野菜は作期を分散して長期継続出荷し、労働の季節偏差を縮小 ・てん菜直播を導入 | <ul style="list-style-type: none"> ・露地野菜を導入した複合経営 ・露地野菜の作付で馬鈴しょの過作を回避 ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理、青色申告の実施 ・作目別原価の把握と分析 ・市場動向に的確に対応した計画的生産・販売 | <ul style="list-style-type: none"> ・給与制の導入 ・社会保険等の加入 ・農繁期における臨時雇用従事者の確保 <p>※労働力構成については、標準的な家族農業経営を想定し、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主たる従事者 2 人 ・補助従事者 4 人 <p>として示す。</p> |
| | 経営面積計 | 30.0ha | | |

注) 組織経営体とは、複数の個人又は世帯が、共同で農業を営むか、又はこれと併せて農作業を行う経営体とする。(例えば、農事組合法人、株式会社の他農業生産組織のうち経営の一体性及び独立性を有するもの。)

第3 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの新たに農業経営を営もうとする青年等が目標とすべき農業経営の指標

第1の3の(3)に示した目標を達成しうる青年等が目標とすべき農業経営の指標は、第2に定めるものと同様である。

ただし、農外からの就農者や農家子弟のうち親から独立した経営を開始する者にあつては、指標を例示すると次のとおりである。

[個別経営体]

| 営農類型 | 経営規模 | 生産方式 | 経営管理の方法 | 農業従事の態様等 |
|------------|--|---|---|--|
| ① 野菜＋畑作 | <作付面積等> ・馬鈴しょ 0.9ha ・小豆 0.9ha ・だいこん 0.9ha ・にんじん(秋) 0.5ha ・食用ゆり根 0.5ha ・緑肥 0.9ha 経営面積計 4.6ha | <主な資本装備> ・トラクター 1.5台 ・フロントローダー 0.5式 ・マニュアルスプレッダ 0.3台 ・ライムソアー 1.0台 ・ボトムプラウ 1.0台 ・ロータリーハロー 1.0台 ・総合播種機 1.0台 ・ポテトplanター 1.0台 ・施肥カルチ 1.0台 ・培土機 1.0台 ・スプレーヤー 1.0台 ・ポテトハーベスター 0.5台 ・ビーンスレッシャー 0.3台 ・ビーンハーベスター 0.3台 ・サブソイラ 1.0台 ・鎮圧ローラー 1.0台 ・人参播種機 0.3台 ・フォークリフト 1.0台 ・農用トラック 1.0台 <その他> ・農地の集団化を図る ・JAの各種共選施設等の利用 ・機械の共同化によるコスト削減と共同作業の実施による省力化 ・土壌診断に基づく適正な土づくりと輪作体 | ・畑作を導入した複合経営 ・露地野菜の作付で馬鈴しょの過作を回避 ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理、青色申告の実施 ・作目別原価の把握と分析 ・市場動向に的確に対応した計画的生産・販売 | ・家族経営協定の締結に基づく給料性、休日制の導入 ・農繁期における臨時雇用従事者の確保 ※労働力構成については、標準的な家族農業経営を想定し、 ・主たる従事者 1人 ・補助従事者 2人として示す。 |

| 営農類型 | 経営規模 | 生産方式 | 経営管理の方法 | 農業従事の態様等 |
|---|--|---|---|--|
| ② 野菜専業 | <作付面積等> ・馬鈴しょ 0.5ha ・Gアスパラガス 0.4ha ・トマト 0.2ha ・食用ゆり根 0.4ha ・緑肥 1.2ha 経営面積計 2.7ha | <主な資本装備> ・トラクター 1.0 台 ・マニュアルプレッダ 0.2 台 ・ライムソアー 1.0 台 ・ボトムプラウ 1.0 台 ・ロータリーハロー 1.0 台 ・ロータリーティラー 1.0 台 ・ポテトプランター 0.5 台 ・精密カルチ 1.0 台 ・培土機 1.0 台 ・スプレーヤー 1.0 台 ・マルチャー 1.0 台 ・ポテトディガー 0.5 台 ・サブソイラ 1.0 台 ・農用トラック 1.0 台 <その他> ・農地の集団化を図る ・機械の共同化によるコスト削減と共同作業の実施による省力化 ・土壌診断に基づく適正な土づくりと輪作体系の確立 ・クリーン農業技術等の導入による農産物の付加価値向上 ・市場動向に応じた計画的な出荷及び販売 | ・高収益野菜に特化し所得の確保 ・部会活動により生産技術の向上 ・共選施設、労働力支援組織の活用 ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理、青色申告の実施 ・原価の把握と分析 ・市場動向に的確に対応した計画的生産・販売 | ・家族経営協定の締結に基づく給料性、休日制の導入 ・農繁期における臨時雇用従事者の確保 ※労働力構成については、標準的な家族農業経営を想定し、 ・主たる従事者 1人 ・補助従事者 2人として示す。 |

第4 第2及び第3に掲げる事項のほか、農業を担う者の確保及び育成に関する事項

1 農業を担う者の確保及び育成の考え方

- ・ 本村の特産品である馬鈴しょなどの農畜産物を安定的に生産し、本村農業の維持・発展に必要となる効率的かつ安定的な経営を育成するため、生産方式の高度化や経営管理の合理化に対応した高い技術を有した人材の確保・育成に取り組む。このため、認定農業者制度、認定新規就農者制度及びそれらの認定を受けた者に対する各種支援制度を活用するとともに、北海道農業経営・就農支援センター、後志農業改良普及センター、農業協同組合等と連携して研修・指導や相談対応等に取り組む。
- ・ また、新たに農業経営を営もうとする青年等の就農を促進するため、これらの青年等に対する就農情報の提供、農地・農業用機械の取得や生活支援などの受入体制の整備、先進的な法人経営等での実践的研修の実施、青年等就農計画の認定・フォローアップ、認定新規就農者向けの支援策の積極的な活用の推進、認定農業者への移行に向けた経営発展のための支援等を行う。
- ・ 更に、農業従事者の安定確保を図るため、農業従事の態様等の改善、家族経営協定締結による就業制、休日制、ヘルパー制度の導入、高齢者及び非農家等の労働力や繁閑期の異なる産地間の労働力の活用等に取り組む。
- ・ 加えて、真狩村農業の将来を担う幅広い人材の確保に向け、職業としての農業の魅力等を発信するとともに、雇用されて農業に従事する者、定年退職後に農業に従事する者、他の仕事とともに農業に従事する者など農業生産に関わる多様な人材に対して、地域に定着し活躍できるよう必要な情報の提供、受入体制の整備、研修の実施、交流会の実施等の支援を行う。

2 本村が主体的に行う取組

- ・ 本村は、新たに農業経営を営もうとする青年等や農業を担う多様な人材の確保に向けて、後志農業改良普及センターや農業協同組合など関係機関と連携して、就農等希望者に対する情報提供、住宅の紹介や移住相談対応等の支援、農業技術・農業経営に要する知識習得に向けた研修の実施や研修農場の整備、必要となる農用地等や農業用機械等のあっせん・確保、資金調達のサポートを行う。
- ・ また、就農後の定着に向けて、販路開拓や営農面から生活面までの様々な相談に対応するための相談対応、他の農家等との交流の場を設けるなど、必要となるサポートを就農準備から定着まで一貫して行う。
- ・ これらのサポートを一元的に行える就農相談員を設置するとともに、真狩村が主体となって、農業委員会、農業協同組合等の関係団体が連携して真狩村地域農業再生協議会を活用し、農業を担う者の受入から定着まで必要となるサポートを一元的に実施

できる体制を構築する。

- ・ さらに、新規就農者等が地域内で孤立することがないように就農相談員は必要な配慮を行うとともに、地域農業を担う者として当該者を育成するときは、必要に応じて、協議の場への参加や地域計画の修正等の措置を講じる。
- ・ 本村は、新たに農業経営を始めようとする青年等が、本構想に基づく青年等就農計画を作成し、青年等就農資金、経営体育成支援事業等の国による支援策や県による新規就農関連の支援策を効果的に活用しながら、確実な定着、経営発展できるよう必要となるフォローアップを行うとともに、青年等就農計画の達成が見込まれる者に対しては、引き続き農業経営改善計画の策定を促し、認定農業者へと誘導する。
- ・ 真狩村が主体となって北海道立農業大学校や後志農業改良普及センター、農業委員、指導農業士、ようてい農業協同組合真狩支所、真狩村畑作・野菜生産組合等と連携・協力して「営農指導カルテ」を作成し、研修や営農指導の時期・内容などの就農前後のフォローアップの状況等を記入・共有しながら、巡回指導の他、年に1回は面接を行うことにより、当該青年等の営農状況を把握し、支援を効率的かつ適切に行うことができる仕組みをつくる。
- ・ 新規就農者が地域内で孤立することのないよう、地域計画の作成・見直しの話し合いを通じ、地域農業の担い手として当該者を育成する体制を強化する。そのために地区毎に行われる常会等への参加を促すとともに、商工会や道の駅真狩フラワーセンターとも連携して、直売所等への出荷のためのアドバイスをを行うなどして、生産物の販路の確保を支援する。
- ・ 前述の「営農指導カルテ」を活用した指導に限らず、村内・村外の産地直送の販売業者・飲食店等への出荷の促進、他産業の経営ノウハウを習得できる交流研修等の機会の提供などにより、きめ細やかな支援を実施する。
- ・ 青年等が就農する地域の地域計画との整合に留意しつつ、本構想に基づく青年等就農計画の作成を促し、青年等就農資金、農業次世代人材投資資金、強い農業・担い手づくり総合支援交付金等の国の支援策や道の新規就農関連事業を効果的に活用しながら経営力を高め、確実な定着へと導く。

さらに、青年等就農計画の達成が見込まれる者については、引き続き農業経営改善計画の策定を促し、認定農業者へと誘導する。

3 関係機関との連携・役割分担の考え方

- ・ 本村は、農業委員会、農業協同組合、農業教育機関等の関係機関と連携しつつ、村が全体的な管理・推進を行いながら、就農等希望者への情報提供や相談対応、研修の実施、農用地や農業用機械等のあっせん・確保、就農後の定着に向けたサポート等を

以下の役割分担により実施する。

- ① 農業委員会は、新たに農業経営を開始しようとする者に対して、農地等に関する相談対応、農地等に関する情報の提供、農地等の紹介・あっせん等を行う。
 - ② 個々の集落（地域計画の作成区域）では、農業を担う者を受け入れるための地域の雰囲気づくり、コミュニティづくりを行う。
- ・ 就農に向けた情報提供及び就農相談については担い手育成センター、技術や経営ノウハウについての習得については北海道立農業大学校等、就農後の営農指導等フォローアップについては後志農業改良普及センター、JA組織、真狩村認定農業者や指導農業者等、農地の確保については農業委員会、農地中間管理機構など、各組織が役割を分担しながら各種取組を進める。

4 就農等希望者のマッチング及び農業を担う者の確保・育成のための情報収集・相互提供

- ・ 本村は、真狩村地域農業再生協議会及び農業協同組合と連携して、区域内における作付け品目毎の就農受入体制、研修内容、就農後の農業経営・収入・生活のイメージ等、就農等希望者が必要とする情報を収集・整理し、北海道及び農業経営・就農支援センターへ情報提供する。
- ・ 農業を担う者の確保のため、農業協同組合等の関係機関と連携して、経営の移譲を希望する農業者の情報を積極的に把握するよう努め、市町村の区域内において後継者がいない場合は、北海道及び農業経営・就農支援センター等の関係機関へ情報提供する。さらに、新たに農業経営を開始しようとする者が円滑に移譲を受けられるよう農業経営・就農支援センター、北海道農業公社、市町村農業委員会等の関係機関と連携して、円滑な継承に向けて必要なサポートを行う。
- ・ 公益財団法人北海道農業公社や後志農業改良普及センター、ようてい農業協同組合真狩支所などと連携しながら、就農希望者に対し、村内での就農に向けた情報（研修、空き家に関する情報等）の提供を行う。
- ・ 生徒・学生が農業に興味関心を持ち、農業が将来の進路の選択肢の一つとなるよう教育機関や教育委員会と連携しながら、各段階の取組を実施する。具体的には、生産者との交流の場を設けたり、農業体験ができる仕組みをつくることで、農業に関する知見を広められるようにする。

第5 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標 その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項

1 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標

真狩村農業の持続的な発展を図るため、第2に例示するような効率的・基本方針第4かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用（農作業受託面積を含む。）の集積に関する目標を、次のとおりとする。

| | |
|--------------------------------------|----|
| 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標 | 備考 |
| 真狩村農用地面積の95%程度 | |

(注)「効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標」は、おおむね10年後（R12）を見通して設定し、この場合、農用地の利用には利用権の設定等を受けたもののほか、水稻においては基幹3作業（耕起・代かき、田植え、収穫・脱穀）の全てを受託している面積、その他の作目においては主な基幹作業を受託している面積を含めるものとします。

2 その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項

- ・ 市町村、農業委員会、農地中間管理機構、農業協同組合、土地改良区等の関係機関・団体が連携し、地域計画の策定を通じ、地域の合意形成を図りながら、面としてまとまった形での農用地の集約化を進めることにより、団地面積の増加を図るとともに、担い手への農用地の集積を加速する。
- ・ 中山間地域や担い手不足地域では、地域全体で農用地の確保・有効利用を図るため、中小・家族経営など地域社会の維持に重要な役割を果たしている経営体の新規就農促進を図るエリアや有機農業の団地化を図るエリア等の設定を促進するとともに、放牧利用や蜜源利用、省力栽培による保全等の取組を進める。

第6 農業経営基盤強化促進事業に関する事項

真狩村は、北海道が策定した「農業経営基盤強化促進基本方針」の第6の農業経営基盤強化促進事業の実施に関する基本的な事項に定められた方向に則しつつ、真狩村農業の地域特性、即ち、複合経営を中心とした多様な農業生産の展開や兼業化の著しい進行などの特徴を十分踏まえて、農業経営基盤の強化の促進に関する計画である地域計画を定め、その実現に向けて、農地中間管理機構による農地中間管理事業及び特例事業を活用して農用地について担い手への集積・集約化を促進し、農用地の効率的かつ総合的な利用の推進を図る。

真狩村は、農業経営基盤強化促進事業として、次に掲げる事業を行う。

1 第18条第1項の協議の場の設置の方法、第19条第1項に規定する地域計画の区域の基準その他第4条第3項第1号に掲げる事業に関する事項

- ・ 協議の場の開催時期については、幅広い農業者の参画を図るため、協議の場を設置する区域ごとに、当該区域における基幹作物である馬鈴しょの農繁期を除いて設定することとし、開催に当たっては、市町村の公報への掲載やインターネットの利用等に加え、他の農業関係の集まりを積極的に活用し、周知を図る。
- ・ 参加者については、農業者、市町村、農業委員、農地利用最適化推進委員、農業協同組合、農地中間管理機構の農地相談員、土地改良区、その他の関係者とし、協議の場において、地域の中心となる農用地の出し手及び受け手の意向が反映されるように調整を行う。
- ・ 協議の場の参加者等から協議事項に係る問合せへの対応を行うための窓口を産業課に設置する。
- ・ 農業上の利用が行われる農用地等の区域については、これまで人・農地プランの実質化が行われている区域を基に、農業振興地域内の農用地等が含まれるように設定することとし、その上で、様々な努力を払ってもなお、農業上の利用が見込めず、農用地として維持することが困難な農用地については、活性化計画を作成し、粗放的な利用等による農用地の保全等を図る。
- ・ 市町村は、地域計画の策定に当たって、都道府県・農業委員会・農地中間管理機構・農業協同組合・土地改良区等の関係団体と連携しながら、協議の場の設置から地域計画の公表に至るまで、適切な進捗管理を行うこととし、地域計画に基づいて利用権の設定等が行われているか進捗管理を毎年実施する。

2 農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準その他農用地利用改善事業の実施の基準に関する事項

- (1) 農用地利用改善事業の実施の促進

真狩村は、地域農業関係者等が農用地の有効利用及び農業経営の改善のために行う自主的努力を助長するため、地域農業関係者等の組織する団体による農用地利用改善事業の実施を促進する。

(2) 区域の基準

農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準は、土地の自然的条件、農用地の保有及び利用の状況、農作業の実施の状況、農業経営活動の領域等の観点から、農用地利用改善事業を行うことが適当と認められる地縁的なまとまりのある地域とするものとする。

(3) 農用地利用改善事業の内容

(2)の区域において、地域農業関係者等の組織する団体が、農用地の効率的かつ総合的な利用を図るための、作付地の集団化、農作業の効率化その他の措置及び農用地の利用関係の調整を図るための農用地利用規程を作成し、それに基づいて認定農業者等の担い手へ農地の集積を推進するものとする。

(4) 農用地利用規程の内容

① 農用地利用改善事業の準則となる農用地利用規程においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

ア 農用地の効率的かつ総合的な利用を図るための措置に関する基本的な事項

イ 農用地利用改善事業の実施区域

ウ 作付地の集団化その他農作物の栽培の改善に関する事項

エ 認定農業者とその他の構成員との役割分担その他農作業の効率化に関する事項

オ 認定農業者に対する農用地の利用の集積の目標その他農用地の利用関係の改善に関する事項

カ その他必要な事項

② 農用地利用規程においては、①に掲げるすべての事項についての実行方策を明らかにするものとする。

(5) 農用地利用規程の認定

① (2)に規定する区域をその区域とする地域関係農業者等の組織する団体で、定款又は規約及び構成員につき法第23条第1項に規定する要件を備えるものは、基本要綱様式第4号の認定申請書を真狩村に提出して、農用地利用規程について真狩村の認定を受けることができる。

② 真狩村は、申請された農用地利用規程が次に掲げる要件に該当するときは、法第23条第1項の認定をする。

ア 農用地利用規程の内容が基本構想に適合するものであること。

イ 農用地利用規程の内容が農用地の効率的かつ総合的な利用を図るために適切なものであること。

ウ (4)の①のエに掲げる役割分担が認定農業者の農業経営の改善に資するものであること。

エ 農用地利用規程が適正に定められており、かつ、申請者が当該農用地利用規程で定めるところに従い農用地利用改善事業を実施する見込みが確実であること。

③ 真狩村は、②の認定をしたときは、その旨及び当該認定に係る農用地利用規程を真狩村公報への掲載、インターネットの利用その他の適切な方法により公告する。

④ ①から③までの規定は、農用地利用規程の変更についても準用する。

(6) 特定農業法人又は特定農業団体を定める農用地利用規程の認定

① (5)の①に規定する団体は、農用地の保有及び利用の現況及び将来の見通し等からみて農用地利用改善事業が円滑に実施されないと認めるときは、当該団体の地区内の農用地の相当部分について農業上の利用を行う効率的かつ安定的な農業経営を育成するという観点から、当該団体の構成員からその所有する農用地について利用権の設定等若しくは農作業の委託を受けて農用地の利用の集積を行う農業経営を営む法人（以下「特定農業法人」という。）又は当該団体の構成員からその所有する農用地について農作業の委託を受けて農用地の利用の集積を行う団体（農業経営を営む法人を除き、農業経営を営む法人となることが確実であること、定款又は規約を有していることなど政令第9条に掲げる要件に該当するものに限る。以下「特定農業団体」という。）を、当該特定農業法人又は特定農業団体の同意を得て、農用地利用規程において定めることができる。

② ①の規定により定める農用地利用規程においては、(4)の①に掲げる事項のほか、次の事項を定めるものとする。

ア 特定農業法人又は特定農業団体の名称及び住所

イ 特定農業法人又は特定農業団体に対する農用地の利用の集積の目標

ウ 特定農業法人又は特定農業団体に対する農用地の利用権の設定等及び農作業の委託に関する事項

③ 真狩村は、②に規定する事項が定められている農用地利用規程について（５）の①の認定の申請があった場合において、農用地利用規程の内容が（５）の②に掲げる要件のほか、次に掲げる要件に該当するときは、（５）の①の認定をする。

ア ②のイに掲げる目標が（２）に規定する区域内の農用地の相当部分について利用の集積をするものであること。

イ 申請者の構成員からその所有する農用地について利用権の設定等又は農作業の委託を行いたい旨の申出があった場合に、特定農業法人が当該申出に係る農用地について利用権の設定等若しくは農作業の委託を受けること又は特定農業団体が当該申出に係る農用地について農作業の委託を受けることが確実であると認められること。

④ ②で規定する事項が定められている農用地利用規程（以下「特定農用地利用規程」という。）で定められた特定農業法人は認定農業者と、特定農用地利用規程は認定計画とみなす。

（７）農用地利用規程の特例

① （５）の①に規定する団体は、その行おうとする農用地利用改善事業の実施区域を含む周辺の地域における農用地の保有及び利用の現況及び将来の見通し等からみて効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積を図ることが特に必要であると認めるときは、当該実施区域内の農用地について利用権の設定等を受ける者を認定農業者及び農地中間管理機構に限る旨を、当該認定農業者及び農地中間管理機構の同意を得て、農用地利用規程に定めることができる。

② ①の規定により定める農用地利用規程においては、（６）の②に掲げる事項のほか、次の事項を定めるものとする。

ア 認定農業者の氏名又は名称及び住所

イ 認定農業者に対する農用地についての利用権の設定等に関する事項

ウ 農地中間管理事業の利用に関する事項

エ その他農林水産省令で定める事項

③ 真狩村は、①の規定により定められる農用地利用規程の申請があったときは、その旨を真狩村公報への掲載、インターネットの利用その他の適切な方法により公告し、当該農用地利用規程を当該公告の日から２週間公衆の縦覧に供する。この場合、利害関係人は、当該縦覧期間満了日までに当該農用地利用規程について、真狩村に意見書を提出することができる。

④ 真狩村は、①に規定する農用地利用規程について申請があった場合、（５）の②

の要件のほか、次に掲げる要件に該当するとき、真狩村は（５）の①の認定を行う。

ア 農用地利用改善事業の実施区域内の農用地につき１の（８）の権利を有する者（以下「所有者」という。）の三分の二以上の同意が得られていること。

イ 農用地利用改善事業の実施区域内の農用地の所有者等から当該農用地について利用権の設定等を行いたい旨の申出があった場合に、当該認定農業者が当該利用権の設定等を受けることが確実であると認められること。

- ⑤ ①に規定する事項が定められている農用地利用規程について、認定を受けた場合には、当該農用地利用規程に係る農用地利用改善事業の実施区域内の農用地の所有者等（農地中間管理機構を除く。）は、当該農用地利用規程において利用権の設定等を受ける者とされた認定農業者及び農地中間管理機構以外の者に対して、賃借権、使用貸借による権利その他の農業経営基盤強化促進法施行規則（昭和 55 年農林水産省令第 34 号以下「施行規則」という。）第 21 条の 4 で定める使用及び収益を目的とする権利の設定若しくは移転又は所有権の移転を行ってはならない。
- ⑥ ①の認定において、利用権の設定を農地中間管理機構に行う場合の当該利用権の設定等の対価は、当該農用地の位置、形状、環境、収益性等を比較考量し、算出する。
- ⑦ ①の農用地利用規程の有効期間は、認定を受けた日から起算して 5 年とする。
- ⑧ ①の認定を受けた団体は、毎年 12 月に農用地利用改善事業の実施状況に関し、必要な報告をすることとする。

（８）農用地利用規定の変更等

- ① （５）の②の認定を受けた団体（以下「認定団体」という。）は、（５）の①の認定に係る農用地利用規程を変更しようとするときは、真狩村の認定を受けるものとする。

ただし、特定農用地利用規程で定められた特定農業団体が、規則第 21 条の 5 で定めるところにより、その組織を変更して、その構成員を主たる組合員、社員若しくは株主とする農業経営を営む法人となった場合において当該特定農用地利用規程を変更して当該農業経営を営む法人を特定農業法人として定めようとするとき又は施行規則第 22 条で定める軽微な変更をしようとする場合はこの限りではない。

- ② 認定団体は、①のただし書きの場合施行規則第 22 条で定める軽微な変更をしようとする場合を除く。）は、その変更をした後、遅滞なく、その変更した農用地利用規程を真狩村に届け出るものとする。

- ③ 真狩村は、認定団体が（５）の①の認定に係る農用地利用規程（①又は②の規定による変更の認定又は届出があったときは、その変更後のもの）に従って農用地利用改善事業を行っていないことその他政令第 13 条で定める事由に該当すると認めるときは、その認定を取り消すことができる。
- ④ （５）の②及び（６）の③並びに（７）の③及び（７）の④の規定は①の規定による変更の認定について、（５）の③の規定は①又は②の規定による変更の認定又は届出について準用する。

（９）農用地利用改善団体の勧奨等

- ① 認定団体は、当該認定団体が行う農用地利用改善事業の実施区域内の農用地の効率的かつ総合的な利用を図るため特に必要があると認められるときは、その農業上の利用の程度がその周辺の当該区域内における農用地の利用の程度に比べ、著しく劣っていると認める農用地について、当該農用地の所有者（所有者以外に権原に基づき使用及び収益をする者がある場合には、その者）である当該認定団体の構成員に対し、認定農業者（特定農用地利用規程で定めるところに従い農用地利用改善事業を行う認定団体にあつては、当該特定農用地利用規程で定められた特定農業団体を含む。）に利用権の設定等又は農作業の委託を行うよう勧奨することができる。
- ② ①の勧奨は、農用地利用規程に基づき実施するものとする。
- ③ 特定農用地利用規程で定められた特定農業法人及び特定農業団体は、当該特定農用地利用規程で定められた農用地利用改善事業の実施区域内にその農業上の利用の程度がその周辺の当該区域内における農用地の利用の程度に比べ、著しく劣っていると認められる農用地がある場合には、当該農用地について利用権の設定等又は農作業の委託を受け、当該区域内の農用地の効率的かつ総合的な利用を図るよう努めるものとする。

（10）農用地利用改善事業の指導、援助

- ① 真狩村は、農用地の有効かつ適切な利用を図るため、必要があると認めるときは、農用地利用改善団体となる要件を備える団体に対して、農用地利用規程を定め、農用地利用改善事業を行うよう促す。
- ② 真狩村は、農用地利用改善団体が、農用地利用改善事業の実施に関し、農業委員会、農業協同組合及び農地中間管理機構の指導及び助言を求めてきたときには、それぞれの組織の役割に応じて、農用地利用改善団体の主体性を尊重しながら、その団体の活動を助長する上で必要な指導及び助言が積極的に行われるように努める。

3 農業協同組合が行う農作業の委託のあっせんの促進その他の委託を受けて行う農作業の実施の促進に関する事項

- ・ 地域計画の実現に当たっては、担い手が受けきれない農用地について適切に管理し、将来的に担い手に引き継ぐことが重要であるため、農作業受委託の推進に向けて、農業支援サービス事業者による農作業受託料金の情報提供の推進や、農作業受託事業を実施する生産組織の育成、地域計画の策定に向けた協議における農作業受委託の活用の周知等を行うことにより、農作業の受委託を促進するための環境の整備を図る。

4 その他農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項

(1) 農業経営基盤の強化を促進するために必要なその他の関連施策との連携

ア 真狩村は、真狩地区道営水利施設等保全高度化事業（令和3年度～令和10年度）による農業生産基盤整備の促進を通じて、畑の区画整理（整地・暗渠汚水・心土破碎）を進めるとともに、野菜集出荷施設等の農業近代化施設の導入を推進し、効率的かつ安定的な農業経営を目指す者が経営発展を図っていく上での条件整備を図る。

イ 真狩村は、真狩地区道営水利施設等保全高度化事業（令和3年度～令和10年度）によって農村の活性化を図り、農村の健全な発展によって望ましい農業経営の育成に資するよう努める。

エ 真狩村は、地域の農業の振興に関するその他の施策を行うに当たっては、農業経営基盤強化の円滑な促進に資することとなるように配慮するものとする。

(2) 推進体制等

① 事業推進体制等

真狩村は、農業委員会、後志農業改良普及センター、ようてい農業協同組合真狩支所、農用地利用改善団体、その他の関係団体と連携しつつ、農業経営基盤強化の促進方策について検討するとともに、今後10年にわたり、第1で掲げた目標や第2、第3の指標で示される効率的かつ安定的な経営の育成に資するための実現方策等について、各関係機関・団体別の行動計画を樹立する。

また、このような長期行動計画と併せて、年度別活動計画において当面行うべき対応を各関係機関・団体別に明確化し、関係者が一体となって合意の下に効率的かつ安定的な経営の育成及びこれらへの農用地利用の集積を強力に推進する。

② 農業委員会等の協力

農業委員会及び農業協同組合は、農業経営基盤強化の円滑な実施に資することとなるよう、真狩村地域農業再生協議会等のもとで相互に連携を図りながら協力

するように努めるものとし、真狩村は、このような協力の推進に配慮する。

5 農地中間管理機構が行う特例事業に関する事項

- (1) 真狩村は、北海道一円を区域として特例事業を行う農地中間管理機構との連携の下に、普及啓発活動等を行うことによって同機構が行う事業の実施の促進を図る。
- (2) 真狩村、真狩村農業委員会、ようてい農業協同組合真狩支所は、農地中間管理機構が行う中間保有・再配分機能を活かした特例事業を促進するため同機構に対し、情報提供、事業の協力を行うものとする。

第7 その他

この基本構想に定めるもののほか、農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項については、別に定めるものとする。

附則

- 1 この基本構想は、令和5年9月27日から施行する。
- 2 農業経営基盤強化促進法等の一部を改正する法律（令和4年法律第56号）において、同法による改正前の農業経営基盤強化促進法の適用を受けるとされた規定に関するこの基本構想の適用については、なお従前の例によるものとする。